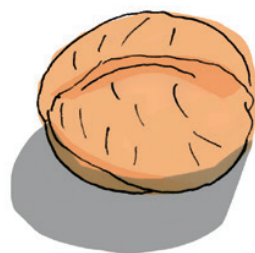


# 世田谷文学館 ニュース

SETAGAYA LITERARY MUSEUM

館長の作家対談  
島田 雅彦（作家）



2020年度の教育普及事業活動報告

2020年度の企画展・コレクション展事業報告

安西水丸「カティサーク自身のための広告」  
(村上春樹共著『象工場のハッピーエンド』CBS・ソニー出版 1983年)  
© Masumi Kishida

## 館長の作家対談

ゲスト  
島田雅彦  
(作家)

聞き手  
菅野昭正  
(世田谷文学館館長)

「無限カノン」三部作「彗星の住人」「美しい魂」「エトロフの恋」に続く「スノードロップ」を昨年上梓。旺盛な執筆活動を続ける島田雅彦さんをお迎えし、当館館長がお話を伺いました。



## 小説の持ち味

菅野▼島田さんの作家活動は、どのくらいになりますでしょうか。

島田▼1983年にデビューしましたので、38年目になります。

島田▼在学中のデビュー作「優しいサヨクのための嬉遊曲」以前には、習作などは書いておられませんでした。

島田▼習作的なものはありましたが、特には発表していません。

菅野▼題名を「サヨク」と片仮名にしたことが成功の鍵だったのではないのでしょうか。「左翼」だと前の世代に対する単なる抵抗に見られがちですが、「サヨク」だと新鮮な、新しい関心のある層が出てきたようにも見えます。近作の自伝的な小説『君が異端だった頃』(以後『異端』)でも、この

表記について書いておられますね。

島田▼いわゆる「左翼」には、団塊の世代あたりの人たちの暑苦しさがありました。むしろ私の在学中にはもう、そういう人たちは大学にいませんでしたが、私の通った川崎高校は、高校全共闘の頃に機動隊が入った全国的にも珍しい学校で、「69年神話」というのが根付いていました。先輩が偉大であり、あれで自由を勝ち取ったのだという伝説が順繰りに下級生に申し送られていて、私の世代では大分風化していましたが、3年上の先輩は色々オルグ(勧誘)されたようです。

菅野▼高校時代に一種の圧力があって、その雰囲気が出たにあらわれているんですね。

島田▼もう、うざったくてですね。一方的にノンポリ扱いされて。

菅野▼我々の高校時代と比べると全く違っていて、とても自由な感じがします。我々の時は何しろ戦争中でしたから。

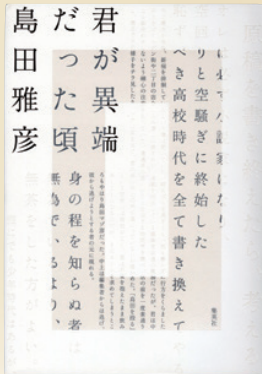
島田雅彦(しまだ・まさひこ)

小説家。1961年東京生まれ。東京外国語大学ロシア語学科卒業。在学中の83年『優しいサヨクのための嬉遊曲』でデビュー。『夢遊王国のための音楽』(84年)で野間文芸新人賞、「彼岸先生」(92年)で京鏡花文学賞、「退廃姉妹」(2006年)で伊藤整文学賞、「カオスの娘」(07年)で芸術選奨文部科学大臣賞、「虚人の星」(15年)で毎日出版文化賞、「君が異端だった頃」(19年)で読売文学賞受賞。著書に『徒然王子』『カストロフ・マニア』『スノードロップ』など。



『カストロフ・マニア』新潮社 2020年(単行本は2017年)

『優しいサヨクのための嬉遊曲』福武書店 1985年(単行本は1983年)



『君が異端だった頃』集英社 2019年



『スノードロップ』新潮社 2020年

ております。

菅野▼昔から島田さんの作品を読んでいて一貫して感じるのは、アクチュアリティに対する関心の高さ、感覚の鋭さがあります。例えば、エイズが流行しはじめるとエイズを題材に取り上げるとか、帰国子女の問題が出てくるとそれを素早く取り上げるとか、その時々同時代のトピックスを捉えて、それを正面から野暮に向かい合うのではなく、僕の言い方では、搦め手から入っていつて、風刺とか戯画とかアイロニーとか色んな武器を繰り出して、ひっくり返して、物語をつくっている。そういう対抗世界、幻想空間の中に物語をつくる手法は、ご自分で色々方法的に考えられて編み出したものなのでしょうね。

島田▼小説というジャンルのメリットを最大限に活かそうと思った場合、その雑食性に依拠するのが一番得だという考えです。小説には風刺の部分もあるし、あるテーマについて網羅的に書く百科全書的な側面もありますし、同時に私生活とか体験の告白という部分もあります。非常に多岐にわたる周辺ジャンルを全部巻き込むような雑食性が、小説の持ち味だと思います。

## 絶望するにも暑苦しい

菅野▼島田さんは文学的運動神経が発達しておられて、色々な領域を、のろろ歩くのではなく、疾走したり飛躍的に飛んでいたりする印象があります。想像力の運動神経が発達した小説家といえよいかな。『異端』には小学校高学年で小説家を志したとありますが、島田さん自身も早くからそう思われたのですか？フィクションの部分もあるかもしれませんけども。

島田▼そこは割と事実即して、まだ文学が諸ジャンルの雄という位置にあった影響かと思えます。実際、映画とかポップカルチャーとか、いわゆるサブカルチャーに凌駕される前夜、まだ1980年代前半には文学に圧倒的な力があつたように思います。批評についても、文芸評論家



が多くいて、しっかりと発信力を持っていられし、文学や小説のことだけではなく世相の移り変わりとか、政治的な気分の変化とか、折々の事件との関わりの部分もウォッチャーとしてしっかり見ていた。世相の分析も含めた形で批評が機能していた時代というのが、私の若い頃だったと思います。それが90年代から変質してきた感があります。まして、批評家がつくる現代文学のコンテクストが無視されて、無視しても売れば成立する様に変わっていったのが90年代半ばからかなと思います。

菅野▼確かに小説は読まなければならないでしょうけれども、売れることがすなわち読まれることでもないのだけれども、売れることが先行する時代に変わったのかもしれない。文学のみならず他の芸能分野も同じ様な状況かもしれません。

島田▼そのときに歴史的連続性が断たれた感じが

します。先人の業績や時代の流れは、ひとつのラインの中にあるはずなので、一応それらを踏まえてものを考える、書くというスタンスを皆が取っていたはずなのですが、歴史と縁を切っても成立するものになりました。ちょうど、製造業がサービス業に乗り換えられる時期であり、世界経済における日本の地位が、グローバルズムによって変質していく時期と重なります。それは歴史修正主義がはびこりだした時期とも重なっていて、いわゆる「新しい教科書をつくる会」などのグループによって、南京大虐殺はなかった歴史的修正主義が広がっていく時期です。あの頃から、文学のコンテクストを無視するような人たちが幅を利かせていつて、今日のネットウヨに繋がっている感じがします。

菅野▼そういった流れの中でも、島田さんは一貫して変わらないですね。もちろんずっと成熟されたと思いますし、デビュー作の非常に軽快な文体は、その軽やかさが魅力である一方、軽佻浮薄などという厳しいが、しかし誤解に基づいた批評もあつた記憶があります。文体に関しては、あの頃と今では随分変わったような感じがしますが、ご自分ではどのように思われますか？

島田▼そうですね。ただ、年を取るとしつこく説教くさくなると巷間言われているので、自分では注意しています。教職のメリットもあって、常時20代前半くらいの人たちと付き合っているという言葉の変化に割と敏感についていけるかなというのがあります。まあ、最初から軽かった人は、年を取ってもそれほど重くならないです(笑)。

菅野▼けれども、あなたは軽さを自己仮装していたのかもしれないですね。

島田▼いやいやいや。

菅野▼話は戻りますが、最初の出発点のある部分は、先行世代にあたる全共闘世代の圧力や存在に対する反発からはじまっているようにお見受けしましたが、そうすると、どうしてもアンチになりますよね。

島田▼アンチになる明確な意図というよりは、

「ちよつと無理」という感じの方が強かったです。中上健次は異例なのかもしれませんが、あいう風に感じたり書いたりにはまず無理だという頭がありました。

菅野▼中上さんの名前が出たので、野球に例えて比較すると、島田雅彦は七色の球を投げる変化球投手だと思っています。中上さんは直球ですよ。

島田▼剛球ですね。

菅野▼ただ剛球のコースが行き詰まったところであって、「路地」が消えて、アジアへ出ていったところでしたね。

島田▼よく暴投もする(笑)。団塊の世代でも、その後に村上春樹が出てきます。

菅野▼村上さんは、島田さんの何年前にデビューしていましたか？

島田▼79年の「風の歌を聴け」ですから4年くらい前です。けれども春樹の作風というのは、ちよつと暑苦しい全共闘世代からすると、感覚的には私たちの世代により近いです。明るさとか、消費社会とかのお洒落な付き合い方みたいなことも含めて、彼は同時代の人よりも、少し下のジェネレーションに歓迎されたはずだし、私も『異端』の中でも書きましたが、放つておけば春樹風の軽い作風でいいのだと思います。

菅野▼村上さんが出てきたことで、島田さんが出やすくなった面はあるでしょうね。

島田▼出やすくなった一方、春樹のエピゴーネン(亜流)は駄目なのです。

菅野▼当時、村上さんのデビュー作を雑誌「群像」の「創作合評」で取り上げたことがあって、それに僕も参加しました。上田三四二さん、三木卓さんとの鼎談で、「風の歌を聴け」と立松和平の「火遊び」の二篇について話し合いましたが、上田さんは作中の食べ物に着目して、片方はかつ井や大盛そばで、片方はビールとフライドポテトなどハイカラなもので、どちらも飲み食いすることばかり出てくると言っておられたのを覚えていいます。僕は「風の歌を聴け」も一種の全共闘風の挫折小説で

はないかと思えます。その挫折から何とか希望を見つけると、明るさが出てくる訳ですが。  
**島田**▼屈折はありますが、団塊世代らしい表現ではなくなっていますよね。大体、絶望するにも暑苦しいんですよ、団塊の人たちは。

### アメリカに対抗する文化

**菅野**▼作家を志すきっかけとなった作家や、作品はありましたか。  
**島田**▼図書館で時代毎のマイブームをつくって、例えば、読みやすいと思いい五木寛之を全集で読んで、大江健三郎、安部公房、三島由紀夫というようなところに流れていくような、割と王道を歩んできたつもりです。文学史に沿って、網羅的に読みました。

**菅野**▼勤勉な勉強家ですね。ロシア文学を専攻した動機はどのようなのですか。

**島田**▼私は冷戦時代の子どもですので、日本に限りは普通に同盟国としてのアメリカンポップカルチャー、ハリウッド映画の影響を圧倒的に受けました。フォークギターを買って貰って、ジーンズを穿いて、ビートルズとかをコピーするような世代ですので、それが恥ずかしくて堪らなかった。それに対抗するのは何かと考えると、アメリカ自体もカウンターカルチャーなのだけれど、そのアメリカにカウンター的に対抗し得る強い文化はソヴィエト、ロシアなのかなと思っていました。もともと外国語を勉強したかったので、選択にあたっては一番ものになりにくいロシア語を選びました。

**菅野**▼今のお話を伺うと、島田さんは少年の頃から日本はアメリカに従属しているという思いを持っておられるんですね。それが島田さんの小説の中に一貫して、何かの要素になっ

しょうから。

**菅野**▼あの小説では、人々の頭の中にマイクロチップが入れられたことになっています。今はまだ人間は人工知能に辛うじて操作されていない段階だと思いますが、これは起こり得ることですね。

**島田**▼今のところはそうですが、中国あたりを見ていると外堀は埋められているような感じがします。権力による二元的管理を人民が諦めて受け入れている状態なので、逆に中国ではコロナ(COVID-19)の収束が早かったとも言えます。監視カメラや個人情報への二元的管理は中国が一番進んでいて、警官が不思議な眼鏡をかけてパトロールしているそうです。それを通して通行人を見ると、眼鏡の画面にその人の個人情報が出てくる。それこそ、生体にチップを埋め込むまでは時間の問題かなと思います。二元的権力による管理、さらにAIによる二元的支配となつたときに、それに抵抗する根拠やアクティビティを考えると、それは反ナチ的なものになると思います。が、どこまで民主主義を信じられるかという話になるのではないのでしょうか。

**菅野**▼島田さんは中国に行かれたことはありますか？

**島田**▼何度か訪れていて、ウイグルやチベットにも行っています。

**菅野**▼今でもやはり、格差は酷いのではないのでしょうか。ああいう二元的な国家になつてもね。

**島田**▼ええ、酷いものです。

**菅野**▼『虚人の星』(2015)には、中国と日本のダブルスパイのような人物が出てきます。星新一は作家の実名ですよ。総理大臣の松平定男は戦前に松平という宮内大臣がいましたが、そこからの着想でしょうか。

**島田**▼いや、特に気にしないでください。星新一は

ているような気がします。

**島田**▼そうですね。今や日米同盟は自明のことですが、それほど昔のことではありません。団塊の世代はヤンキー・ゴー・ホームと反対しましたが、春樹以降になると反米なんて言うこと自体がばかっているという話に変わっていきます。そもそも日本が自主独立の経済なり政治なりを確立したことなど一度もありません。まあ、これはリベラルの人間の専売特許でしたが、今はリベラルも日米同盟容認ですから。それでもやはり、この矛盾は今に続いていきますし、未来に禍根を残すだろうと思います。そのへんは、私が唯一古いところなのかもしれません。ただ実際問題、日米関係だけではなく中国の存在、ロシアの存在というのを忘れてはいけません。アメリカに隷属する状態が続いたのは、ひとつには敗戦とそれに伴う借金がありました。それがある程度返済し終わった段階で、今度はアメリカが日本からどれだけお金を吸い上げるかということで日米関係は構築されてきました。次はアメリカが中国を金づるにする方



『虚人の星』だから苗字は星なのですけど、星っていったら飛雄馬じゃないだろうくらいのもので深い意味はありません。ただ、星新一先生とは私が若い頃に飲む機会がありました。ちよつと変わった方で、純文学に対する怨嗟の深さなどをお慰めたことがあります。途中で「お前も純文学じゃないか」と怒り出すので、私はずっと小学生の頃から先生を尊敬していますと言いつつ続けた。「ショートショート」のシリーズは、SF好きの小学生のバイブル的な作品です。  
**菅野**▼宗猛とか、『優しいサヨクのための嬉遊曲』の千鳥姫彦は「優しい」と対応するように雅な名前ですが、作中人物の名前に深い意味はないのですね。何かの仕掛けかと思ひ、その意味を考えたりしていました。  
**島田**▼そういうふうには勘ぐる人がいるだろうなと思つて書いています。  
**菅野**▼アメリカの大統領補佐官だったかな、アルツハイマーという人も出てきましたね。  
**島田**▼『虚人の星』の各国のVIPは皆、病氣の名

向に進み、日本はもうお役御免になる。それでも中国を牽制し続けなければならないから、中国の力をどこかで削ぐ必要がある。アメリカと中国が直接、軍事衝突したらえらいことになるので、日露戦争のときのように、漁夫の利を得るために中国と台湾、中国と日本を戦わせて、双方が弱つたところで一番の利得を獲得する。これは普通に考えたら当たり前のことです。

**菅野**▼あり得るシナリオかもしれませんね。今、アメリカの影響力がどんどん低下していて、中国は一带一路とか覇権主義の軌道をずっと走っている。それがどのように交錯するかは、島田さんが仰るように、本当に難しいアクチュアルな問題だと思います。いずれ、そういう小説を書いていた

**島田**▼今、東京新聞で連載しているのが正にそうです(パンとサーカス)東京新聞朝刊2020年7月)。

### 病氣小説

**菅野**▼小説を書くことを犬の散歩に例えると、犬がこちへ行こうと勝手に人間を引っ張るように、筆が予想しない方向に動くこともあるのでしょうか。

**島田**▼それがなければライブ感が味わえませんし、1年がかりで長編執筆を進めていくときは、自分をエンターテインでなければ続けられないです。その意味では、当初の構想と180度違つて着地するようなものが一番の成功だと思います。

**菅野**▼『カストロフ・マニア』の主人公のミロクは、病院で治験のアルバイトをするとき「36」(ミロク)が割り振られていますが、もうひとつは弥勒菩薩に見立っているのでしょうか。弥勒菩薩は56億7000万年後に衆生を救うから、ミロクは物語の最後に生き残って希望を

前です。ハンチントンとか。

**菅野**▼これも単なる一時の思ひつきと考えていいのでしょうか、それでも少し、風刺とか皮肉のような感じがありますよね。

### カワサキ・ディープ・サウス

**菅野**▼『異端』の中でふたつ、お伺いしたいことがあります。ひとつは、二人称で書いていること。二人称小説というと、ミシェル・ビュトールの『心変わり』がありますが、これは読者に対する呼びかけを意図したものだと思ひます。ヘミングウェイの『誰がために鐘は鳴る』では、瀕死の主人公が最後に自分の生涯を振り返る自己審問の場面が、二人称で書かれています。島田さんの二人称はどのような発想に基づいているのでしょうか。

**島田**▼過去を回想するときは、過去の自分との対話という形態になりますよね。昔のことを書くには、後悔も伴います。時間論の話になります。が、必ずしも過去・現在・未来のような順番で、線的に時間が並んでいるとは最近思わなくなつてきています。意識の中においては、過去も現在も同時並列している。自分だけでも自分じゃないし、他人のようだけど自分であるという、そのへんの距離感が二人称だとしつくりくる感じがしうか。

**菅野**▼もうひとつは「異端だった」という過去形です。

**島田**▼今は違うのかとよく聞かれて「違うと思ひたい」とか答えていたのですが、特に異端も正統もないような心境にもなつてきています。「異端でよかったな」といった気持ちです。

**菅野**▼あの場合の「異端」は、現代の日本に対してちよつと異議申し立てがあるような感じでしょか。一人称で書く自伝小説にするつもりはありま

託される。これでミロクについて読み違ひはありませんか？

**島田**▼ないです。あともうひとつは、自分の息子の名前です。

**菅野**▼終わりに至るまでの出来事は、書いておられる途中で新しいアイデアが出てきたのでしょうか。

**島田**▼はい。ちなみに惑星物理学の先生に聞くと、56億7000万年後は太陽が超巨星になつて地球の軌道も飲み込んでしまうので、もう太陽系がないそうです。

**菅野**▼太陽のプラズマが放出されることで、地球が荒廃する。

**島田**▼コロナ質量放出です。コロナは日食等のときに見えるだけですが、表面に非常に温度の高いものが出ていて、時々フレア爆発が起こると磁気嵐が発生して地球まで飛んできます。その影響を受けると磁気が変わつてしまつて、大停電が起きることもあるそうです。小説ではコロナ質量放出と書いたのだけれど、コロナウイルスと書けば大予言者でした。

**菅野**▼小説ではボトルネック・ウイルスという人工ウイルスが出てきますが、こちらも最初からの設定でしたか？

**島田**▼最初からの構想です。久しぶりの病氣小説でした。

**菅野**▼構想したときに、2003年のSARSによるパンデミックをどこか意識された点はありませんか。

**島田**▼はい。パンデミックについては、ペストの時代から文学のかなり大きなテーマであり続けていますし、エイズ小説『未確認尾行物体』(1987)を書いた経験もありましたから、常に考えていました。もうひとつは、人工ウイルスだということですね。これは技術的には研究所で合成できますし、現に癌の治療のためにウイルスをつくるというようなことは実際に行われています。その管理を厳密にしないと、盗み出して細菌テロとかウイルステロとかを考える奴もいるで

せんでしたか？

**島田**▼この手のものを書く場合、一人称は露骨すぎるんです。

**菅野**▼島田さんが面白いのは、誇張の修辭学に長けているところだと僕は思っています。「誇張」と「見立て」ですね。例えば、『異端』に書かれる「カワサキ・ディープ・サウス」は、アメリカの南部に見立てる一種の誇張した言い方ですね。川崎は、本当にああいう町なのですか。

**島田**▼南北問題があります。私が住んでいるのは山林でもあります。住宅地の北部と、海側というか工場地帯のほうの南部は、これはもう住んでいる人々が違います。北部の方はホワイトカラーの人が多くて、南部はもつと古くからの工場労働者と彼らのための繁華街の世界ということで、完全に分断されている感じがします。文化も違います。そもそも、この南北は交わらないです。

**菅野**▼イタリアみたいですね。

**島田**▼棲み分けがあります。工業地帯のある町ではある程度共通する所があるらしく、北九州とか、大阪だったら尼崎等はちよつと川崎の南北問題に近いものがあるそうです。

**菅野**▼それはよく分かります。阪急、阪神では同じ鉄道でも随分雰囲気違いますからね。ああいう仕掛けにして、作品の中で小説の枠組みをつくつているところがあつて、それはとても上手くいつている。TM川を挟んで東京が帝国であるといった発想は、他の作家にはあまり見られないと思いますけれど、一種の地政学的なのは大げさかもしれませんが、島田さんの独創です

**島田**▼一応フィクションで土地を、世界を書くときに、当然作家の空想の世界というのが半分を占めると思ひますので、結局、それはパラレルワールドなんです。とても現実に即しているように見えるし、現実をモデルにしているのですが、実際に作品で描かれる土地というのは、パラレルワールドということになる訳ですね。

(2021年1月29日世田谷文学館にて)



photo by Masataka Nakano

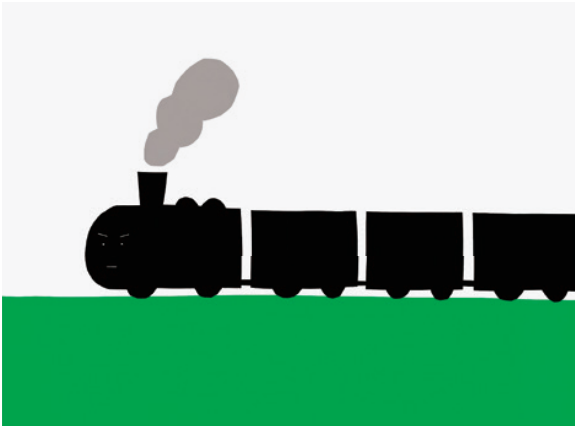
イラストレーター 安西水丸展

2021年4月24日(土)～8月31日(火)  
2階展示室

「結局のところ、水丸さんは絵を描くだけではなく、最初から最後まで、安西水丸という一人の人間を絵というかたちで表し続けていたのだという気がする。そしてそういう部分は、ほかの誰をもつてしても代わりをつとめることができない。」

― 村上春樹「もうここにはいないとわかっていても」

安西水丸（昭和17年―平成26年・1942―2014）は、1970年代より小説、漫画、絵本、エッセイや広告など、多方面で活躍したイラストレーターです。はじめ広告代理店や出版社に勤め、デザイン等の仕事をしながら、嵐山光三郎の勧めで「ガロ」に漫画を掲載、南房総で過ごした日々などを題材とした『青の時代』が高い評価を受けます。独立後は、村上春樹をはじめとする本の装幀や、『がたんごとんがたんごとん』などの絵本、和田誠との展覧会、広告や執筆活動など、幅広く活躍しました。「その人にしか描けない絵」を追求し、身近なものを独自の感性で表現し



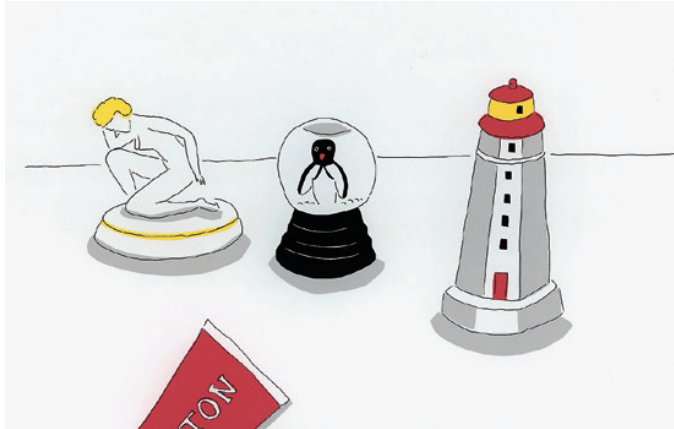
「がたん ごん がたん ごん」展覧会出品作 制作年不明



自著『アマリリス』1989年(新潮社)



装丁を手がけた書籍 村上春樹『中国行きのスロウ・ボート』1983年(中央公論社)



タイトル・制作年不明



『青の時代』1980年(青林堂)



嵐山光三郎共著『ビッキーとポッキー』1993年(福音館書店)※ペーパーバック版は1976年



写真/小田基行(小学館)

谷口ジロー展

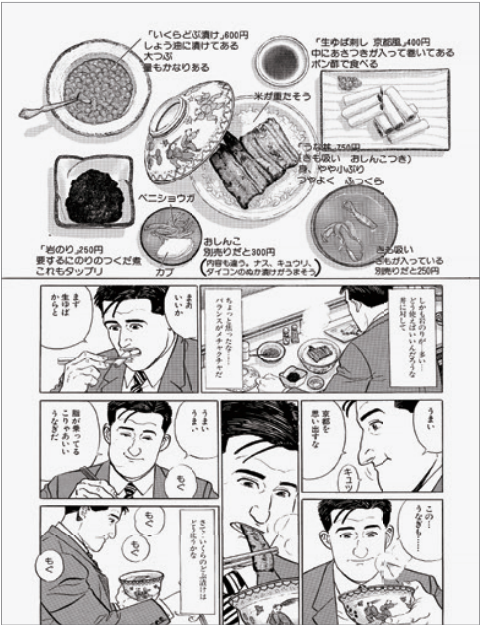
2021年10月16日(土)～  
2022年2月27日(日)  
2階展示室



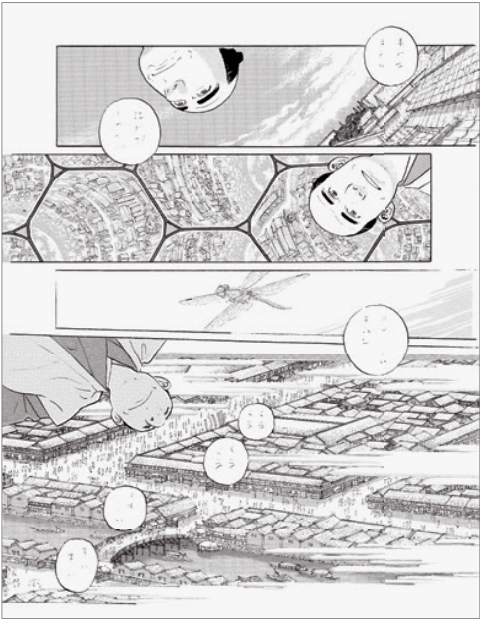
『孤独のグルメ』新装版 2007年



『坊っちゃん』の時代 1987年



『孤独のグルメ』自筆原稿



「ふらり。」自筆原稿

漫画家・谷口ジロー（昭和22年―平成29年・1947―2017）の名は、『坊っちゃん』の時代』5部作（1987～96年、共作：関川夏史）と『孤独のグルメ』（1994～2015年、原作：久住昌之）で存知の方も多いことでしょう。これらの作品で谷口ジローの卓越した描写力、見事な構成力はいかなく発揮され、『坊っちゃん』の時代』（1987～96年連載）は第22回日本漫画協会賞優秀賞、第2回手塚治虫文化賞マンガ大賞に輝き、「孤独のグルメ」は映像化され、現在最もよく知られる作品になりました。他にも多くの原作者が谷口に大きな信頼を寄せ、作品化されています。

しかし、谷口作品の魅力はそれだけに留まりません。オリジナルストーリーでも多くの素晴らしい作品が描かれ、日本の漫画愛好者のみならず、国境を越えて読み続けられています。「犬を飼う」（1991年）をはじめとする、家族と飼い犬や飼い猫との深い情愛の物語に自分でしょう。「父の暦」（1994年）や「遙かな町へ」（1998年）では、父親の生き方へのわだか

まりと自らの記憶や郷愁を辿って現在の自分に帰する心の道程が描かれ、江戸の巷を歩みながら時に自由に魂を遊ばせる「ふらり。」では漫画ならではのイメージーションに読者を誘い、「歩くひと」（1990～91年）での日常のなかの詩情と言葉にされない心情を汲み上げる表現など、珠玉の作品を数多く残しました。これらの作品の胸を打つ感動は、強烈な絵柄や効果、描き文字などではなく、的確かつ写実的な姿形、表情、感情表現、そのうえに緻密な背景描写、空間構成を成しうる谷口の高いスキルに支えられ、海外では文学作品と比肩して語られることも多く、その作品性に高い評価が与えられ数々の賞を受けています。谷口は石川球太、上村一夫の元でアシスタントを務め、1970年代初めに青年誌でデビュー。原作もの、オリジナルストーリー 双方で制作し続け、劇画で磨き上げた描写力、再現力、演出力など画面を構築する画力と、物語を生む力が備わり、独自の作品世界に結実してゆきます。

本展では、若き日の劇画調の原画から、代表作「歩くひと」、「父の暦」、「犬を飼う」、「孤独のグルメ」、「坊っちゃん」の時代」、「神々の山嶺」、「セン



『坊っちゃん』の時代』カラー原画



「歩くひと」カラー原画

セイの鞆」、未完の遺作となった「光年の森」、ルブル美術館の依頼で描かれた「千年の翼、百年の夢」などまで、100点以上の作品原稿、カラー

原画で谷口ジローの圧倒的な絵の表現力を実感していただき、卓抜な展開力と稀有な詩情とを併せもつ作品世界の魅力をお楽しみいただきます。

## コロナ禍の教育普及事業について

当館の教育普及事業「どこでも文学館」では、講師と参加者、また参加者同士の対話や触れ合いに重きを置いています。コロナ禍においてはその性質上、プログラムの大幅な変更を余儀なくされ、大きな声を出す朗読のワークショップなどは、残念ながら開催を見送ることとなりました。

一方で、例年開催していたワークショップの核となっている部分をあらためて見つめ、コロナ対策をしながらプログラムを組み直すことは、それぞれの企画の意義を再確認する、とても良い機会となりました。

「この企画はオンラインの方が、幅広い年齢層や地域の方が参加して対話が盛り上がりそう」ワークショップ形式は密になるから難しいが、講演だけの開催でも伝えたいメッセージを発信できるのではないか」など、従来のメソッドにとらわれることなく、担当者同士や講師との意見交換を繰り返し、実施方法を探りました。

最初にオンラインで実施したのは、7月の「へんとわ」オンライン哲学カフェ。宮澤賢治の「雨ニモマケズ」をテーマに、小学生から大人まで幅広くご参加いただき開催しました。「外出をあまりしていないから、知らない人と話す機会が皆無。身近な人にはない意見が聞けて新鮮だ」という参加者もいて、コロナ禍でオンラインイベントを行う新たな意義にも気づかれました。

いくつかオンラインイベントを行った後、コロナ禍で初めてのリアル開催となったのは、10月の「ショートショートを書く」。

2020年2月以来館内イベントを行うことができなかったため、実際に8か月ぶりに子どもたちを迎えたときの喜びは格別でした。年が明けて1月の感染再拡大につき、またも中止やオンラインへの切り替えが相次ぐことになりましたが、今後も状況に応じて実施方法を柔軟に変えつつ、より多くの方が楽しめる企画を行っていきたくと考えています。リアルでもオンラインでも、皆様のご参加を心よりお待ちしております。

### コロナ禍の教育普及事業【リアル開催】

#### だれでも小説家 「ショートショートを書く」

2020年10月17日(土)18日(日) 14:30～17:00  
10月24日(土) 14:30～16:00  
会場：1階文学サロン

#### ワークショップ実施のための安全対策

本講座は、国内の第2波新規感染者数が減少傾向であることを鑑み、「3密」対策を徹底したうえで、館内での開催を決定しました。今回の参加募集は15名に絞り、会場は常時換気された通常150名程を収容可能なスペースで実施。また講師席を含めた各席は、間仕切りし、距離を空けて設置。念の為、除菌シートと封ができるゴミ袋を配布し、各々で処理できるように準備しました。

#### 全員で協力し実施した3日間

今年で4年目となる講師は、世田谷に育ち現役作家として活躍する荒居蘭さん。荒居さんが投影するテキストを見ながら、各自がワークシートに取り組み、ショートショートと呼ばれる原稿用紙120枚程度の短編小説を制作しました。

活動方法は例年とは異なり、参加者同士でワークシートや原稿を読みまわして、アイデアや意見を共有するグループ作業は避けました。また、荒居さんの解説や参加者の発表の際はマイクを使用し、講師と参加者が打ち合わせる際は、間仕切り越しに小声で会話をする等、お互いに「3密」を意識し、無事に講座を終えることができました。



#### 今後について

より良い作品を創作する為には、講師と参加者間の「密」なやりとりが鍵です。その為には講師が、各参加者のワークシートに点するメモや短い文章を紡ぎながら、進行に合わせて的確な助言を与えることが重要です。これらをいかに安全に実行できるか、今後の状況も見極めたうえで、より良い形を模索していきたいと思っています。

### コロナ禍の教育普及事業【オンライン開催①】

#### 「お家から行く世界探検！」

2020年8月10日(月・祝) 15:00～17:00

本講座は、世田谷文学館初のオンライン講演会として開催されました。講師は探検家の高橋大輔さん。秋田県のご自宅から講演をしていただきました。探検の様子を映した写真やGoogle Earthを多用し、画面越しながら臨場感のある講演となりました。参加した方からは「お家にいながら旅行気分を味わえた」という声も。区内のみならず、全国各地から60名以上の方の参加があり、ギアナ高地やロビンソンクルーソー島、剣岳といった探検譚に胸躍る、「山の日」にふさわしいイベントとなりました。最後に参加者の皆さんからの質問と高橋さんの回答の一部をご紹介します。

Q 危険な目に遭っても探検を続ける勇気はどこから湧いてくるのですか？

A 「勇気では立ち向かってはいないと思います。むしろ悪いことを前向きに捉え、「生きている」ことを実感し、感謝できる瞬間だと思ひこみます。

Q 会社を辞めて探検の道を選んだ、その決断をするときに高橋さんの背中を押したものは何ですか？

A おもしろい方を選んだ。これに尽きます。



探検家・高橋大輔さん 自宅から講演



Google Earthをつかって ロビンソンクルーソー島

### コロナ禍の教育普及事業【オンライン開催③】

#### 「ことばとからだ」オンラインワークショップ 「ダンスでつながろう」

2020年12月13日(日)  
第1回 13:00～14:30  
第2回 15:00～16:30



当館では2014年より、日本女子体育大学ダンス・プロデュース研究部のみなさんを講師に迎え、「ことばとからだ」と題したワークショップを開催してきました。例年は参加者全員が全身を使って一体となる表現活動を行っていましたが、今年はコロナ禍で従来の形は難しい状況。そこで、学生の皆さんとの打ち合わせを重ねながら、オンラインでのダンスワークショップという初の試みに挑戦することとなりました。

手法は、講師が「雪」「おもちゃ」など、冬にまつわる単語を言い、その言葉から連想したポーズや動きを参加者がやってみて、それらをつなげた1分間のダンス作品を即興でつくるというもの。同じ言葉でも連想するかたちはそれぞれ違い、組み合わせると、とても独創的なダンス作品が出来上がりました。みんなで何度か踊ってみて、最後に意見を出し合い、作品のタイトルを考えます。第1回目は「冬、雪の一週間。12粒の結晶」。第2回目は「真冬の今」となりました。映像を公開していますので、ぜひご覧ください。



【公式】世田谷文学館 Youtubeチャンネル  
https://www.youtube.com

### コロナ禍の教育普及事業【オンライン開催②】

#### 工作キット配布型オンラインワークショップ 「pipo」といっしょに工作とおはなしの時間」森の動物リースづくり

2020年8月23日(日) 14:00～14:40

例年、当館のライブラリー「へんとわ」にて実施していた工作と読み聞かせの子ども向けワークショップを、本年度は感染状況を考慮し「キット配布型オンラインワークショップ」として実施しました。今回のワークショップは、参加者のみなさまのもとへ工作キットを郵送し、講師が工作キットの作り方を画像共有アプリInstagram（インスタグラム）のライブ配信で説明するというものです。毎回工作のテーマが変わり、今回は「森の動物」をテーマにリースを制作しました。

はじめに参加者はライブ配信で講師手作りの物語の読み聞かせを楽しんだあと、読み聞かせと関連した工作をライブ配信を見ながら作業を進め、時にはライブ中にコメント欄で講師へ質問したり感想を伝えたりしながら、思い思いの作品を作っていました。ライブ動画はプログラム終了後、講師のインスタグラムアカウントや、本年度より運用始めた文学館公式Facebookページで共有することと繰り返しいつでも視聴可能としました。

本年度は本ワークショップに限らず、実施形態をオンラインや感染症対策を徹底した環境下で実施するなど試行錯誤の年となりましたが、結果、初めての試みであるオンラインワークショップではライブ配信を介して講師と参加者が双方向でコミュニケーションを取りながらプログラムに参加するという、新たな形態での取り組みへと至りました。

オンライン開催という手法により、文学館へのアクセスや時間の制限を超え、より「いつでもどこでも」だれでも「参加できる博物館事業への可能性が感じられる事例となりました。



おうちのでの工作の様子をワークショップの参加者がSNSへ投稿してくれました。



SNSに投稿された作品(画像は参加者のInstagramより抜粋しました)

### 2019年度の教育普及事業活動報告

※「世田谷文学館ニュース」74号再録記事 74号(2020年3月発行)は、新型コロナウイルス感染症による事業変更に伴い配布を中止したため、本号で再録します。

#### どこでも文学館 幼稚園・保育園連携

世田谷文学館では、「いつでもどこでも」だれでも参加できる」を活動方針として「どこでも文学館」と呼ばれる出張型展示を、図書館や小中学校にて実施し、幅広い層と地域への浸透を図っております。

2019年度は、世田谷区教育委員会が取り組む「世田谷区幼児教育・保育推進ビジョン」の基本方針の一つである、「文化・芸術とふれあうための各園等における環境づくり支援」の一環として委託を受け、中町幼稚園と希望丘保育園にて、絵本作家 宮西達也の作品を題材とした「宮西達也と子どもたち」展を開催いたしました。

今回の出張展示は、世田谷文学館内で2015年に開催した企画展「宮西達也ワンダーランド展」へんてこリッな絵本の仲間たち」を元に、200万部を超える大ヒット作「テラノサウルスシリーズ」を中心とした作品・作家紹介パネル8枚、関連絵本約80冊、直筆イラスト4枚で再編成されたキットです。宮西達也さんの作品は、カラフルな色彩と大胆でありながら繊細でやさしいタッチにあふれた心温まるストーリー展開とあいまって、多くの人々を魅了してやみません。

世田谷区は、「幼児期の教育が生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの」と位置づけており、世田谷区全体で乳幼児期における教育・保育がより一層充実し、子どもが人を思いやり、心豊かにのびのびと生きる力を身につけていくことをめざしています。

展示期間中には、園内に設置した本棚の傍らで、保護者が子どもに読み聞かせする姿を見かけ、さらに保育士さんからのアンケートでは、作品世界を知るきっかけや、本を通じたコミュニケーションの芽を育むことが出来たとの感想や報告もあり、まだ自分では物語を読めない小さな子どもたちにも、本の楽しさが伝わり、幼稚園保育園との連携の手ごたえを感じました。



中町幼稚園 2019年6月1日～30日



希望丘保育園 2019年9月1日～30日



人形や舞台装置などの作品パーツのほか、ムットーニ（武藤政彦氏）愛用の服飾品や楽器、カメラなどが展示された



ムットーニ《月世界探検記》の原作となった海野十三「月世界探検記」を収録した『十八時の音楽浴』のほか、海野と親父の深い横溝正史との書簡を展示



フォトコーナーや会場パネルには武藤氏の愛猫（クジャク）の姿も。

当館では1995年の開館以来、文学作品をモチーフとしたムットーニ作品を収蔵してきました。現在は10作品を所蔵しており、当館の特色あるコレクションのひとつとなっています。

円環構造からなる装置の多様な動きに合わせて、人形、音楽、光に加え、自動からくり人形作家であるムットーニ（武藤政彦）氏本人による朗読が織りなす世界観によって表現されるその作品は、他に類のない総合芸術作品として多くの人々を魅了しています。

本展では、ムットーニのからくり上演と合わせて、世田谷の下北沢を舞台とした萩原朔太郎の『猫町』や、田園風景の広がる砦から宇宙へと向かう海野十三の『月世界探検記』のほか、芥川龍之介の自筆原稿など、ムットーニ作品のイメージの源泉となった多彩な文学者たちの資料をあわせてご紹介しました。また、本展では、萩原朔太郎の『漂泊者の歌』に着想を得て制作されたムットーニ作品『シグナル・メモリー』（2018年、個

人蔵）を特別に出版しました。

「文字」での鑑賞に留まらず、年齢や国籍を越え、視覚や聴覚からも存分に文学の世界へと誘うムットーニ作品は、まさに「体験する文学」と言えるでしょう。からくり箱が見せる永遠の一幕劇、ムットーニの魔法に魅せられる企画となりました。

本展は感染症対策に基づき、鑑賞は全日日時指定の事前予約制といたうえて二回の上演での鑑賞人数を10人と制限し、換気のため扉を開放しサーキュレーターを導入するなど、徹底した感染症対策を講じながらの開幕となりました。検温や手指の消毒など、様々な協力頂きましたご来場者をはじめ、本展開催に関わってくださった関係者の皆様へ厚く御礼申し上げます。

＊本展は2020年4月25日より開催の予定でしたが、新型コロナウイルス感染症に伴う緊急事態宣言の発令を受け開催を延期し、2020年7月7日から2021年3月31日まで開催いたしました。

## 綴じられた時間の物語——ムットーニのからくり文学館

2020年7月7日（火）～2021年3月31日（水） 1階展示室

### 2020年度のコレクション展事業報告

## 連続講座『遠藤周作 神に問いかけつづける旅』書籍刊行のお知らせ

2019年度に当館で開催された連続講座「遠藤周作 神に問いかけつづける旅」をもとにした書籍が慶應義塾大学出版会より刊行されました。

連続講座の5名の講師と、講座企画者である当館館長・菅野昭正による遠藤周作論6編を収録。

当館ミュージアムショップでもお求めいただけます（通信販売はしていません）。

### 【内容】

西欧と日本のあいだ  
「神」をめぐる 文化風土をめぐる（菅野昭正）

遠藤周作さんとカトリックの信仰（加賀乙彦）

昭和戦後の笑い  
遠藤周作、狐狸庵先生（持田叙子）

文学者、信仰者としての誠実さ（富岡幸一郎）

遠藤周作と歴史小説（高橋千剣破）

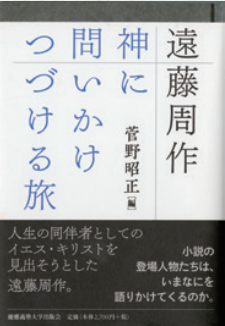
遠藤周作とフランソワ・モーリヤック  
『炎の河』と『わたしが棄てた・女』との「妙な渴望」（福田耕介）

あとがき（菅野昭正）

編者：菅野昭正

発行：慶應義塾大学出版会

160頁、本体2,700円（税抜）、2020年11月30日発行



▼「海」「海紅」「風」「カブリチオ」「経堂雑誌」「空想カフェ」「くさくさ」「九品仏川柳会句会報」「群系」「原型」  
富山「鴻」「心の花」「埼東文学」「抒情文芸」「詩霊」「川柳研究」「双鷲」「たね」「短歌人」「地中海」「飛火」  
「富山県歌人」「ブチ★モンド」「文藝軌道」「文章歩道」「焰」「本のParking」「窓」「ランブル」「りんごの木」「暦日」（五十音順・団体名敬称略）

▼安藤カークー様 奥山篤信様 原葵様 門玲子様 山田二子様 山本幸久様

▼尼崎芸術文化協会 井上靖記念文化財団 一茶記念館 愛媛県生涯学習センター 大岡信研究会 神奈川近代文学館 紙の博物館 慶應義塾大学アート・センター 駒澤大学神文化歴史博物館 さいたま文学館 高志の国文学館 たましん地域文化財団 田山花袋記念文学館 中央区立郷土天文館 中山義秀顕彰会 NEAT PAPER 日本歌人クラブ 沼津市芹沢光治良記念館 姫路文学館 福井県ふるさと文学館 文京ふるさと歴史館 松山市立子規記念博物館 宮沢賢治学会イーハトーブセンター 与謝野晶子倶楽部

### 資料受贈報告

2020年11月1日～2021年1月13日

### 2020年度の企画展事業報告

## 安野モヨコ展 ANNORMAL

2020年7月1日（水）～9月22日（火・祝）  
2階展示室

デビュー30周年を迎えた漫画家・安野モヨコ（1971）のこれまでの軌跡をたどる展覧会を開催しました。

安野モヨコは高校3年生でデビューし、1995年に連載を開始した『ハッピー・マニア』で躍人気漫画家となりました。「ふるえる程のしあわせ」を求めて様々な男との出会いと別れを繰り返す主人公・重田加代子（通称・シゲカヨ）の姿は多くの女性たちの共感を呼び、その後は女性向け漫画誌にとどまらず青年誌に『花とみつばち』『さくらん』『働きマン』、少女漫画誌に『シュガシュガルー』、さらに新聞紙上で連載開始された『オチビサン』など活躍のフィールドを果敢に広げ、幅広い読



者層に漫画を届けてきました。

作品の相次ぐドラマ・映画・アニメ化で人気に拍車がかかり、安野モヨコは過労による体調から、2008年に『オチビサン』を除く連載の休業を発表します。移り住んだ鎌倉で、四季の移ろいや失われゆく風景を独自の紙版画の技法で『オチビサン』に描き続けるとともに、「枚絵のシリーズ制作や個展開催などを通じて漫画以外の絵師としての才能にも磨きをかけていきます。そして2013年、5年ぶりの復帰作として『鼻下長紳士回顧録』を発表。20世紀初頭のバリの娼館を舞台に、様々な変態的欲望を抱えた紳士たちと、そこで小説家として目覚めてゆく娼婦コレットの姿を描きました。

現在、ファン待望の『ツッピー・マニア』の続編となる『後ハッピー・マニア』の連載も好評を博し、漫画家としての活動を再び本格化させています。

性別や年齢の枠を超えた様々な読者の心をとらえ、喜びと力を与える物語を創り出してきた安野モヨコ。本展では、男と女それぞれにとつての恋愛、あるいは社会人の現実と少女の空想世界といった、相反するテーマを描き分ける振幅の大きい作品世界を「女」「男」「荒」「和」「美」「醜」「夢」「現」「破」「創」のテーマに分け、安野（Anno）の普通でない（unnorm al）、唯一無二の「ANNORMAL」「アンノーマル」な作品世界を500点に及ぶ作品原画を中心にご紹介しました。

当初は春季（4/25～6/28）開催の予定でしたが、新型コロナウイルス感染状況の悪化により開催を延期し、臨時休館（3/31～6/1）を挟んで最終的に7月からの開催となりました。チケットは日時指定制を導入し、感染症対策に基づき安全安心な館内運営を心がけて来場者をお迎えしてまいりました。SNS等での反響も大きく会期後半から次第に入場者も増え、最終的に1万人を超える皆様にお越しいただきました。

## 没後10年 井上ひさし展

### 「希望へ橋渡しする人」

2020年10月10日（土）～12月6日（日）  
2階展示室

絶望から希望へ橋渡しをする人がいないものだろうか……

いや、いないことはない。

このことは、井上ひさし最後の戯曲『組曲虐殺』（2009）の主人公、プロレタリア作家・小林多喜二のセリフの一節です。本展では、このことばをタイトルに掲げました。

2020年は、全世界が新型コロナウイルス感染症という「絶望」に覆われました。このような状況下に開催した本展は、「希望」へ「橋渡し」を

する」その人こそ、井上ひさしという作家であったことを、あらためて知らされる展覧会となりました。

本展開催にあたりましては、検温・消毒・マスク着用などの感染症防止対策にご協力いただき、適切な距離感を保ちながらご覧いただく展示会場となりました。しかしながら、井上作品の戯曲から選り抜いた「希望のことば」の投影と150点もの直筆資料などを通して、ご来館のみなさんに井上作品の豊かなエネルギーが確かに手渡される機会となり、静かな熱気に包まれた展覧会であつたと思います。

「絶望」的な状況の中でも、ほんの少しだけ上を向いてみようと思わせる、まさに「希望」へと誘う「やさしく、ふかく、おもしろい」ことばを伝え続けた井上ひさしさんの存在に、私たちはこれから勇気づけられていくことでしよう。



△ 展示風景より。井上戯曲作品からの「希望のことば」に包まれた会場。

▽ 本展のメインビジュアルは、井上ひさしの戯曲作品から「希望のことば」を選び、当館職員による手書きの文字で作家の肖像を描いた（アートディレクション：アベキヒロカズ）。

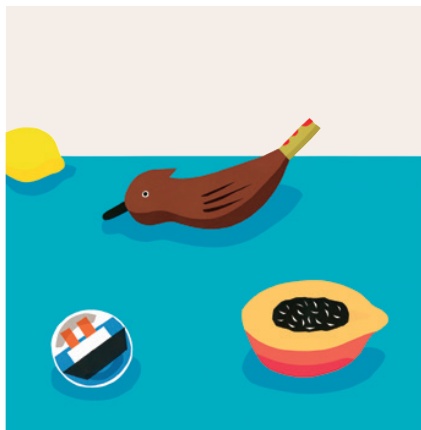


## 企画展

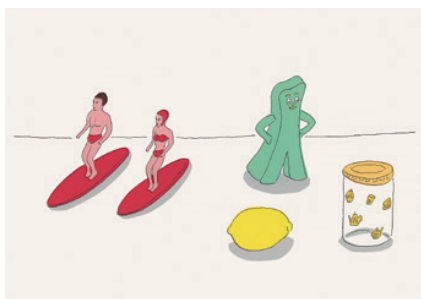
## イラストレーター 安西水丸展

4月24日(土)～8月31日(火)

観覧料:一般900円、高校・大学生・65歳以上600円、小・中学生300円



《口笛のきこえる》  
1985年  
illustrated by  
Mizumaru Anzai  
© Masumi Kishida



《サーフィン》  
2008年  
illustrated by  
Mizumaru Anzai  
© Masumi Kishida

## Special Exhibitions

## The work of illustrator Anzai Mizumaru Exhibition

Exhibition period: Apr 24 (Sat.) – Aug. 31 (Tue.), 2021

Admission fee: General 900 yen, Students (University, High School) / Seniors (Over 65) 600 yen, Students (Junior High, Elementary School) 300 yen

## ご来館にあたってのお願い

当館では新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、換気を含めて衛生管理を徹底させ、会場運営を行います。お客さまにおかれましては、次のことへのご協力をお願いいたします。

- 感染症対策のため、混雑時は入場を制限させていただきます。
- 37.5℃以上の発熱のある方は入館をお断りします(入館時に検温させていただきます)。
- 館内ではマスク(もしくはそれに代わるもの)をご着用ください。
- 咳、咽頭痛等、風邪のような症状がある方。体調がすぐれない方、感染拡大している地域や国への渡航歴が14日以内にある方はご来館をお控えください。
- 感染症対策のため、お客さまの個人情報を必要に応じて保健所等の公的機関に提供する場合があります。
- クロークサービスはございません。大きなお荷物でのご入館はお控えください(ベビーカー置き場はあり)。
- 駐車場は利用台数が限られます。公共交通機関のご利用をお願いします。
- その他、注意事項の追加・更新がございますのでご来館前に必ず文学館HPをご確認ください。

## 開館時間:

10時～18時(展覧会入場は17時30分まで)

## 休館日:

毎週月曜日(月曜日が祝日の場合には開館し翌日休館)

## 交通案内:

京王線「芦花公園」駅南口より徒歩5分  
小田急線「千歳船橋」駅より京王バス(千歳鳥山駅行)  
「芦花恒春園」下車徒歩5分

\* 駐車場は利用台数が限られます。  
公共交通機関のご利用をお願いします



## コレクション展

受贈記念  
夷齋先生・石川淳

4月24日(土)～9月26日(日)

観覧料:  
一般200円  
高校・大学生150円  
65歳以上・小・中学生100円

石川 淳



## 同時開催

ムットーニのからくり  
劇場

ムットーニ  
《月世界探検記》  
1995年  
原作:海野十三  
「月世界探検記」



## Permanent Collection

## Jun Ishikawa Exhibition

Exhibition period: Apr 24 (Sat.) – Sept. 26 (Sun.), 2021

Admission fee: General 200 yen, Students (University, High School) / Seniors (Over 65) 150 yen, Students (Junior High, Elementary School) 100 yen

- \* 企画展・コレクション展ともに団体(20名以上)は2割引  
団体のご利用をご希望の方はあらかじめご連絡下さい  
障害者手帳をお持ちの方は一般料金の半額
- \* Groups of 20+ visitors will receive a 20% discount on admission fee to collection and special exhibitions  
Disability certificate holders will be admitted at 50% the general rate

## Safety Precautions when Visiting the Museum

In operating the museum, we take every precaution to maintain hygiene, including ventilation, in order to prevent the spread of Covid-19 infections. We ask visitors for their cooperation in the following.

- As a measure to prevent infections, we limit admission during busy times.
- We refuse admission to those with a fever of 37.5℃ or higher. (Temperatures are measured when entering.)
- Please wear a mask (or the equivalent) while in the museum.
- We ask that you refrain from visiting if you have a cough, sore throat or other cold-like symptoms, if you feel unwell, or if you have traveled to a region or country where infections are spreading within the last 14 days.
- As a measure to prevent infections, we may provide visitors' personal information to public health centers and other public agencies as necessary.
- We do not provide checkroom services. Please refrain from bringing large luggage when visiting. (A baby carriage storage area is available.)
- Parking space is limited. Please use public transportation.
- Other additions and updates will be made to these precautions, so please be sure to check the museum homepage before visiting.

## Visitor Information

Opening Hours: 10:00 am to 6:00 pm (last admission 5:30 pm)

Closures: Every Monday (Closed Tuesday when a national holiday falls on Monday)

Access: 5-minute walk from Roka-koen Station's South Exit (Keio Line)  
5-minute walk from Roka Koshun-en Park (take Keio Bus from Chitose-Funabashi Station [Odakyu Line] towards Chitose-Karasuyama Station [Keio Line])

\* The number of parking spots available for use is limited. Please use public transportation.